

戦争体験談(学徒動員など)

とびせよしみ
飛世義巳さん

昭和 19 年、私は、魚津中学に通っていました。そのころ学徒動員令という政府の命令で、学生でも軍需工場へ動員され働かなければなりませんでした。私は、その年の 7 月 19 日に初めて学徒動員に行きました。魚津中学の 1 学年 200 名は、半分ずつに分かれて半分は荏原の地鉄の荏原の駅のすぐ前にあるアサヒ重工という会社へ、残り 100 人は魚津の日本カーバイド。私は日本カーバイドに行くことになりました。カーバイドは、軍需工場として政府の命令でカーバイドや肥料、ベンゾール、合成ゴム、木造船の接着用に使うメラミンなどを作っていましたが、私はメラミンの製造工場へ配属となり、戦争が終わるまでカーバイドで働いていました。

まず、7 月 19 日には、その当時の魚津中学の 4 年生約 100 人が動員され、次に 10 月頃、一学年下の 3 年生も動員されてきました。仕事はもちろん同じです。戦時中、今では考えられないことですが、昭和 20 年 3 月 26 日私たちは中学 4 年で 5 年生と一緒に卒業式が行われました。卒業した後も 4 年生はそのまま拘束され自由を奪われました。動員から解除される条件は、まず軍隊へいくこと、軍隊の学校あるいは志願、それから大学へ入学すること。それ以外の理由は一切認めないと、政府の力は強大でしたね。

軍需工場に行っているときは、学校には一切行かず、勉強を放棄して、朝から晩まで工場で働きました。仕事の内容は比較的簡単で、年長の学生が指導者として 3 人ほどおられました。グループで同じ仕事をし、石灰だか肥

料に水をかけて化学反応させていくと、いろんな工程を経て、黒い石灰ペー
ストが白いメラミンになっていきました。

戦争が激しくなり魚津にもそういった軍需工場があるため、爆撃の危険が
あるんじゃないかという不安は、不思議なことに一切考えなかったですね。
8月1日の富山大空襲の日には、空襲警報が鳴り、仕事をやめて防空壕入る
よう上司から指示がありましたが、その時勤務していた7、8人は、誰も防
空壕に入らずに倉庫の屋根から富山の空襲の様子を見ました。突然、富山方
面が明るくなるほど火の手があがり、これは大変ひどいことになってしまっ
たと思いましたね。

そのころカーバイドには、強制労働なのか朝鮮からも20歳～30歳ぐら
いの多くの若者が連れて来られて一緒に作業をしていました。私は、メラミン
の作業になる前に7月の終わり頃から9月頃まで電気炉で仕事していました。
高熱の重労働。その時に朝鮮の人二人と仲良くなり、いろんなことを話しま
した。当時、もちろん私たちも食料がなくて、とてもひもじい思いをしてい
ましたが、彼らはおなかを空いて本当に辛い生活をしていました。私は、少
しでもと思い、家にあった大豆を茶筒に入れて分けてあげるとすごく喜んで
くれました。国籍は違えど同じ人間、心が通じあったんです。

そのころ私の父親は召集令状がきて、海軍の整備兵として鳥取県の美保航
空隊で飛行場のいろんな整備作業などしていて、家にはいませんでした。だ
から、戦争が終わって無事で帰ってきたときは、命を落とす人もおられたの
で、本当にうれしく安堵しました。

人の命を奪う戦争は、絶対にやっちゃいけない。戦争をすると国民のだれ
もが影響を受けて日常生活が大変なことになる。今は、平和な時代にみんな

が生活し、好きなことを言えるような時代になっていますけど、戦争をやると「自由」ってものがまず全くなくなるんです。国家の権力が強くなって自由にもものも言えなくなります。だから、もう二度と戦争は起きないようにしなければいけないと感じています。